



櫻田 勝徳

— 創造的民俗学者、創意的教育家 —

岡山大学名誉教授 神立 春樹

元白梅学園短期大学教養科助教

はじめに

「櫻田勝徳 明治三十六（一九〇三）年～昭和五十二（一九七七）年。民俗学者。特に漁村民俗研究で著名。宮城県出身。……昭和四十一年（一九六六）年、白梅学園短期大学教授となり、民俗学・地方史・生活史などの講義を担当。新設の教養科の科長として科の発展に貢献した。著書に『漁村民俗誌』『漁村の伝統』『海の宗教』などがあるが、没後『櫻田勝徳著作集』（全七巻）が刊行された」（『白梅学園短期大学創立二十五周年記念誌』）。この櫻田勝徳先生の白梅学園の教授就任は六三歳の時。講師としての大学教育経験は豊富であるが、

ここでは専任教員として、授業・教育にとどまらず学科長として運営の重責を負われた。私は同年に専任講師として生涯にわたる教員生活が始まった。人生の一齣をそのもとで過ごした者として、柳田国男門下の著名な民俗学者というにとどまらない創造的な民俗学者、かつ創意的教育家、師表櫻田勝徳先生追想の念をこめてこの小文を記したい。

民俗学徒への道

櫻田勝徳の民俗学徒へのきつかけは、慶応義塾大学文学部の卒業論文「非農民考」作成に当り柳田国男を訪れたことにある。すでに「特別講義を聴き深く感動する」が、訪問は

指導教授に勧められてのことである。紹介なしの突然であったが、「幸に朝の散歩からお帰りという風な先生に玄関先でお目にかかり、初めて先生に知っていたのだ」と。「最初にお尋ねした朝に若しも御留守であったら、再びお伺い心構えが当時あったかどうか、もう覚えていないが、誠に幸運であったと思う」。以後、週に幾回か通うようになる。

一九二九(昭和四)年三月慶応義塾を卒業。「ぶらぶらしていた時も、非常にしばしばどうゆうものか先生のお宅を訪ねた」。朝鮮での就職の話があったが、柳田にやめておけといわれた。やがて『明治大正史』を編纂する朝日新聞社の調査部に、第四卷世相篇を担当する柳田の助手として勤務することになった。「同社調査部に与えられた私の机と、上野図書館新聞閲覧室と、柳田先生の書斎の三地点あちこちする資料集めをする時期から執筆、校正等本ができ上るまでの間に、学校時代の講義とはまた違った民俗の勉強をした」。

一九三二(昭和六)年一月に同書刊行、仕事は終了した。そのとき柳田は三百円の謝金を櫻田に与えた。これをもつて、「初めて旅行らしい四国の旅に出た」。徳島、愛媛、高知三県にまたがる、脚絆を巻き布靴を掛けての一ヶ月余の旅である。その後、裁判官で各地に転じこのとき博多にいた父親の許に辿り着く。その博多で五島からの帰りの柳田と会い、その紹介で九大法文学部国史研究室の研究補助員

となった。以後、櫻田は九州西北部の漁村調査を精力的に行ない、また、一九三二(昭和七)、三三年頃には瀬戸内海沿岸を歩いた。

一九三三(昭和八)年秋、来博中の渋沢敬三を宿に訪ね、三五(昭和一〇)年四月に九大を辞し五月一日渋沢のアチックミューゼウム(後、日本常民文化研究所)の研究員となる。齡三二歳、初めて月給を受ける身となった。その後、農林省研究室を基盤に漁村民俗研究に取り組んだ。その後、農林省水産局嘱託、中央水産業会、連合軍総司令部民間情報教育局世論及社会調査部顧問、財団法人日本常民文化研究所理事長、農林省水産庁事務官、同水産資料館館長を経歴する。これらは、アチックミューゼウムを出発点としている。櫻田は柳田国男の導きにより民俗学徒となったが、民俗研究の主要な場は渋沢敬三によってである。

民俗学者としての櫻田勝徳——その創造性

櫻田は早くも一九三四(昭和九)年に『漁村民俗誌』を刊行した。「日本民俗学における海の民俗学を大きく開いたのは櫻田氏の功績、それを助長したのが渋沢」(有賀喜左衛門)というように櫻田はアチックミューゼウムを基盤に研究し、漁村・漁業民俗学を築きあげた。

ところで、日本民俗学の確立は、柳田国男がその理論的

体系化を図った書物・論文を相次いで出した三〇年代の中頃であるという。体系化の基礎となった事業は、いわゆる「山村調査」と、「民間伝承の会」の結成である。「いずれも、柳田の民俗学の基本的方法である比較研究法の信頼性を高めるための信憑性ある資料を全国から獲得するという役割を果たすものであった。『山村調査』は、今日の民俗学の内容を基本的に規定しており、また民間伝承の会は現在の日本民俗学会に接続して、民俗学の研究体制の中心となつている」（福田アジオ）。櫻田はこの山村調査として、

一九三四（昭和九）年度児島県百引村、一九三六（昭和一一）年岐阜県揖斐郡徳山村、岡山県阿哲郡上刑部村大井野を担当した。また、一九三五（昭和一〇）年八月に発足した「民間伝承の会」の世話人となる。「この二大事業の完成に際して櫻田の果たした役割は大きい」（福田）。このように日本民俗学の確立に大きく貢献したが、やがて、柳田及びその門弟たちの民俗学に対する方法論的批判を行なうに至る。

日本民俗学は日本民族の民族的特性を伝承文化の研究によつて明らかにするものである。問題はその方法である。この民俗学における柳田の方法はつぎの如くである。農耕民族である日本人は村を形成するが、そこは調和の取れた世界であった。それは歴史の推移において大きく変化するが、なお伝承されているものがある。この古くからの伝承

を採集し、比較研究を通じてその原型なり、出発点となつた最も古い姿を明らかにする。それはいきおい、古いものが伝承されている僻遠の山地村において古老から聞き取りによる個々の民俗資料を集めることとなる。そして柳田の方法は門弟たち民俗学の主流の方法となつた。

この起源論的方法に対して、櫻田は「村とはなにか」（一九五八年）などの講座「日本民俗学大系」の諸論文において、方法論的批判を展開したのである。生活から遊離した個々の類似民俗資料の重出立証を建前とする方法では伝統的な生活体制の全構造を導きだすことはできないとして、現在における民俗的全体像あるいは構造を明らかにすることを主張したのである。この現在の村を全体的に把握すべきであるという視角は、若い研究者たちの一つの指針であり、櫻田の方法論的批判は、「現在の民俗学の一出发点にあった」（福田）。

櫻田の民俗学者としての功績は有賀のいうごとく漁村・漁業民俗学の開拓にあり、さらに後年には新たな分野（都市の民俗、物質文化と技術、半檀家制）を切り開いた（福田）が、しかし民俗学者としての独自性はこの民俗学の新領域の開拓にもまして、ここにみた民俗学の方法論的反省・批判、民俗学の方角性を示したことにあり、まさしく櫻田勝徳は創造的民俗学者であった。

教育家としての櫻田勝徳——その創意性

櫻田勝徳先生は、一九六六(昭和四二)年四月一日発足の白梅学園短期大学教養科の設置に深く関わった。前年四月早々結成の新科設立のためのプロジェクトチームの一員となり、以後、教養科の内容が構想されていった。それは、専門科目の人文系、社会系、そして自然系にも歴史系科目が設けられた文化史学科であった。教養科の設置は常任理事樋口愛子、カリキュラム編成の中軸の田中未来の教養主義志向のなせることであるが、文化史学科ともいえる教養科となったのは櫻田先生によってである。

その担当科目内の文化史、民俗学の授業内容は、

文化史(一)概論

1 文化史にどう対応するか。2 文化のあり方 (1) 自然と文化(栽培・飼育の文化、道具の文化など) (人間・人種・民族・自然と文化との接点としての自己) (2) 社会と文化

(3) 科学技術と文化 3 文化史の発達 進化論の影響、文化伝播説、文化圏、文化層説など・異質文化の接触とその取捨選択・火・道具・言葉などの歴史のこと 4 明日の文化史づくりへの参加

文化史(二)

日本文化史 (1) 国境をもたぬ日本文化への反省(仲間意識、公の広場形成の弱さ、話

し言葉と文化の路の分離してきた伝統、異邦人への弱さなど) (2) 国外交流を容易ならしめた日本をとりまく海の中の三つの路と国内交通のこと

(3) 伝統深い日本の北と南の文化のちがいはそのにない手Ⅱ村落とその文化 (4) 南北の違いを統一の方向に進めたにない手 交通、移住—文化伝播者・ミヤコ、町、港、市の世界とその文化 (5) 晴と褒とたしなみ(構え、無構え)の文化。たしなみと物質文化。たしなみと社会体制 (6) 開国と開国以後 (7) 近代化の深題

民俗学

(1) 民俗学とは何か? (2) 晴れと褒との区別の明白な世界 ハレとケとの文化の違いとその関連 (3) 日本人の年・月・日及び年令のうけとり方の沿革 (4) 通過儀礼 (5) 年中行事 (6) 祖霊・信仰と家 (7) 縁組による家の所属変更に伴った女性の立場 (8) 家の機能と新しい母

である。櫻田先生がその頃担当された武蔵大学の演習のテーマは都市民俗であったが、それは自ら新しい問題として提起されたものである。白梅での授業は柳田民俗学に対する創造的批判を提示した後であり、櫻田先生の民俗学の精髓がこめられたものであったと思われる。

教養科は櫻田先生の学問方法にもとづき、実地調査学習

を取り入れ実施した。その一例をあげよう。一九六七(昭和四二)年六月八日(一〇日)に文化史Ⅱ(櫻田)・経済史(神立)合同の巡検、千葉県房総半島沿岸漁村調査旅行を行った。参加学生は第一期の二年生二六人。木更津で近江屋甚兵衛資料館、富津町の県立富津海洋資料館、白浜町で柳八十一氏の海洋美術館、東海漁業乙浦工場を見学した。富津海洋資料館では漁法、漁具の変遷の展示、海洋美術館では美術作品を鑑賞した。東海漁業乙浦工場では工場内を見学、捕鯨、鯨解体・加工の話聞いた。富津の婦人センターでは地元の婦人会の六人と座談会、白浜町の宿泊宿長尾荘では海女の二人から聞き取り会をもった。この調査旅行は、櫻田先生の周到な予備調査と、先生を慕う海洋美術家柳八十一氏のご尽力によって充実したものとなった。

櫻田先生は無いに尽くしの発足直後の教養科充足のために腐心された。その一つにかつて館長を勤められた水産資料館の整理本の無償受領である。富永静枝助手(当時)と私を伴って大量の図書から選択した多量の図書資料を教養科は貰い受けた。

渋沢敬三の死去、常民文化研究所は財政基盤が弱体化していた。あるとき、櫻田先生は、白梅学園で引き取りたい、できるだろうか、と話されたことがある。私が転出した後の七〇年度から、同研究所長の河岡武春氏が講師として授

業を担当されたが、そのことの模索もあつてのことである。同研究所の沿革には、「一九七二年 河岡武春を中心に運用されるようになり、この年東京三田の二の橋のマンションに移る」とある。そしてやがて一九八一年、神奈川大学常民文化研究所となり、網野善彦氏を名古屋大学から招致するなどして、そこは日本文化・文化史研究の拠点となった。櫻田勝徳先生の思いを受け止め、もし実っていたならば、白梅学園は大いなる飛躍を遂げたであろうと思われる。

白梅学園の精髓田中未来先生は、櫻田先生について、「その深い学識に裏付けられた、茫洋とした仙人のような風格に接することができたのも幸せでした」と記しているが、これは多くの者が等しく共有するものである。まさしく師表櫻田勝徳先生であつた。

〔参照文献〕

- ①「柳田先生と私」「四国の旅」「渋沢先生とアチックミュージウム」「村とは何か」「村の構成」「現代における民俗変貌への対処の立場から」「調査の態度とその方法について」などの櫻田勝徳の諸論稿。いずれも「櫻田勝徳著作集」に収録
- ②「櫻田勝徳年譜・著作目録」、「櫻田勝徳著作集総序―櫻田勝徳と民俗学―(有賀喜左衛門)」、著作集「第七卷福田アジオなど各巻」解題。いずれも「櫻田勝徳著作集」に収録
- ③「シンポジウム…日本民俗学の五〇年」(『日本民俗学』第一六四号)の諸論稿。特に「櫻田勝徳の現代性」(福田アジオ)、「柳田民俗学以前―中山・早川・櫻田と柳田」(西垣晴次)